

櫛形町文化財調査報告 No.7

おね ばたけ
大畠遺跡

—付 送電線(増穂線)増強工事に伴う鉄塔建設敷地内試掘調査報告—

1989

櫛形町教育委員会

大畠遺跡

1989

櫛形町教育委員会

序 文

大畠遺跡は、櫛形町の南西部に位置する下市之瀬の丘陵上に所在しており、以前から縄文式土器などが出土している事で知られていた遺跡です。平成元年度に櫛形町内を縦断する送電線の増強工事が計画され、たまたま本遺跡の一部が鉄塔建設用地にあたりました。そのため町教育委員会では、工事に先立って文化財保護法に基づき遺跡の発掘調査を実施することになりました。

その結果、古墳時代以降の集石遺構や、この地域でははじめて発見された弥生時代の初め頃の土器など貴重な資料を得ることができました。これらの資料は町民が地域を知り、地域の良さを次代に伝え、地域の新たな文化を創生していくいとぐちとして大きな意味を持つものといえましょう。

最後に、工事に先立つ発掘調査にたいしてご理解をいただいた東京電力株式会社に敬意を表すると共に、今回の調査、報告書作成にご指導、ご協力下さった皆様に心から感謝申し上げます。

平成元年 5月31日

櫛形町教育委員会

教育長 河野 豊

例　　言

1. 本書は山梨県中巨摩郡柳形町下市之瀬字大畑188他、に所在する大畑遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は柳形町教育委員会が実施した。担当者及び調査参加者は以下の通りである。

調査担当　　清水 博（柳形町教育委員会）

調査参加者　　桜田きく江 河野定子 古矢なみ 相川はるみ 桜田定子 中込かやの 桜田みさ江 杉山敏子 若林初美 岩崎登加

調査指導　　新津 健（山梨県教育委員会文化課）

3. 発掘調査は、平成元年3月9日から同月18日まで実施した。また出土品等の整理、報告書の作成は、同年4月20日から同年5月31日まで行なった。

4. 発掘調査、出土品等の整理及び報告書の作成については以下の方々のご指導、ご助言を賜った。記して謝意を表します。

田代 孝・出月洋文（山梨県立考古博物館）　末木 健・中山誠二（山梨県立埋蔵文化財センター）　柳原功一（山梨文化財研究所）

5. 本書の編集は清水が行ない、また文責も清水にある。

6. 写真撮影は造構・遺物とも清水が行なった。遺物の拓影・実測及び造構・遺物のトレースは若林初美・岩崎登加が行なった。

7. 発掘調査にあたって、尾瀬林業㈱から測量器具の貸与等物心ともにご協力を頂いた。

8. 発掘調査によって作成された記録図面、写真及び出土遺物等は柳形町教育委員会において保管している。

凡　　例

1. 造構実測図の水系レベルは海拔高を示す。

1. スクリーントーンの指示は以下の通りである。

は焼土範囲、は発掘区域を示す。

1. 遺物番号は、本文・遺物実測図・造構実測図・写真図版と一致している。

目 次

序文

例言・凡例

目次・挿図目次・図版目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の概観	1
1) 地理的環境	1
2) 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の方法と基本層位	7
1) 調査の方法	7
2) 基本層位	7
第Ⅳ章 発見された遺構と遺物	9
1) 集石遺構	9
2) その他の遺構	11
3) 出土した遺物	12
第Ⅴ章 まとめ	15
参考文献	15
付 章 試掘調査の概要と成果	16
1) 調査の概要	16
2) 調査の成果	16

挿 図 目 次

第1図 大畠遺跡及び試掘地点位置図 [1 / 10,000]	2
第2図 遺跡周辺地形図 [1 / 2,500]	3
第3図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 [1 / 50,000]	5
第4図 大畠遺跡発掘区域図 [1 / 120]	6
第5図 大畠遺跡位置図 [1 / 1,000]	8
第6図 1号・2号集石遺構 [1 / 30]	9
第7図 遺構全体図及び焼土溜り分布図 [1 / 60]	10
第8図 3号集石遺構 [1 / 30]	11
第9図 土壌 [1 / 20]	12
第10図 出土土器 [1 / 3]	13
第11図 出土石器及び木器 [1 / 2]	14
第12図 試掘坑設定図 (G 1～G 2) [1 / 160]	17
第13図 試掘坑平面図及び土層断面図 [1 / 30]	17
第14図 試掘坑設定図 (G 3～G 7) [1 / 160]	18
第15図 試掘坑土層断面図 [1 / 40]	18

図 版 目 次

図版 I	遺跡全景・遺跡遠景 (南より)
図版 II	1号・2号集石遺構 1号集石遺構 2号集石遺構
図版 III	3号集石遺構及びピット 3号集石遺構及び焼土溜り 3号集石遺構
図版 IV	土壌・焼土溜り
図版 V	出土遺物(1)
図版 VI	出土遺物(2)
図版 VII	作業風景・調査参加者

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

東京電力株式会社では、最近の電力需要の増加に対応するため送電線（増穂線）増強工事を計画した。事業実施に先立ち、昭和63年11月に県教育委員会文化課に鉄塔建設敷地内に於ける埋蔵文化財の有無について照会し、あわせて指導を依頼した。県教育委員会文化課では、県立埋蔵文化財センターに依頼して送電線路線内の現地踏査を実施したところ、鉄塔敷地の一部が埋蔵文化財包蔵地に含まれることが判明したため、工事に先だって地元教育委員会と協議し事前の発掘調査を実施するよう指導した。以後、町教育委員会と東京電力㈱は協議を重ね、遺跡にかかる部分については町教育委員会が事前の調査を実施することとしたが、その他にも埋蔵文化財包蔵地にかかる部分があったため、4地点については試掘調査を行うこととした。

期目的には年度末ということもあり調査時期の設定に迷うところがあったが、工事期間とのかねあいもあり、早急な調査がのぞまれた。そのため町教育委員会では3月初旬に文化庁に発掘調査の届出を提出し、3月9日から調査にはいった。

調査は1989年3月9日より開始し、3月18日に終了した。調査面積は約100m²である。調査は対象面積が狭少であったこともあり、全面的に人力によって掘り下げ、造構の有無を確認し後さらに掘り下げるのこととした。

幸い、天候に恵まれたこともあり3月18日には調査を完了し現場を撤収することができた。

第Ⅱ章 遺跡の概観

1) 地理的環境

大畑遺跡は山梨県中巨摩郡櫛形町下市之瀬字大畑に所在している。

櫛形町は甲府盆地の西縁に位置し、その西半部を櫛形山及びその東麓に発達した市之瀬丘陵が占め、東半部は盆地床縁辺に発達した扇状地となっている。甲府盆地の西縁には「南アルプス」と呼ばれる赤石山脈が南北に連なっている。その前衛「巨摩山地」は、糸魚川一静岡構造線によって南アルプスと隔されているが、櫛形山は2,000m程の標高を持ちその名の示すように美しい櫛の姿をとつて「巨摩山地」の中央にそびえている。櫛形山はその東麓で、伊奈ヶ湖断層崖、下市之瀬断層崖等の断層崖地形によって盆地床へと至っている。市之瀬丘陵は伊奈ヶ湖断層前面に発達した洪積扇状地が地盤変動を受けて形成された丘陵状の地形である。丘陵の平面形は扇状を呈し、南北4km、東西2.5kmの規模を持ち標高は400~500mを示している。台地前面は比高差100~120mを有する下市之瀬断層崖を経て盆地床へと至る。台地基盤は櫛形山塊から流れだした洪積扇状地堆積物でその上面を火山性堆積物が覆っている。火山性堆積物は、上位から伝嗣院ローム層・黄白色軽石層・上野山ローム層と続いている。伝嗣院ロームは新期



第1図 大畑遺跡及び試掘地点位置図 [1 / 10,000]

第2図 遠藤周辺地形図 [1 / 2,500]



信州ロームに、上野山ロームは中期信州ロームに各々相当し、黄白色軽石層は古木曾御岳の第1浮石層 (Pm-1) である。

この市之瀬丘陵上には、北から高室川・深沢川・漆川・市之瀬川・秋山川等が流れ、幼年期の侵食地形を刻んでいる。櫛形山を水源とするこれらの諸河川は、平均20°という急激な勾配を持ち、大量の土砂を削り流す。盆地床に流れ出ると急激に流勢を弱め、谷の出口から扇状地を造るが有名な御動使川の形成する扇状地とあいまって広大な「複合扇状地」を形成している。これらの扇状地の扇尖部にあたる桃園・小笠原・下市之瀬などでは地下水位が低く水の乏しい乾燥地となり、逆に豪雨時には洪水に襲われる水田経営に不適な地勢である。

ところで、市之瀬丘陵は南北4kmに及ぶ広大な丘陵であるが、先に述べた諸河川によって開拓され北から伝廟院・六科丘・上野山・御殿山などの小台地にわけられる。大畠遺跡は漆川と市之瀬川に挟まれ、細長く東へ延びる舌状台地の南縁辺部に存在する。この台地上面はかなりの勾配で東方へ傾斜するが遺跡の占地する部位はややなだらかなテラス状を呈している。遺跡の南は市之瀬川の刻んだ小谷を挟んで物見塚古墳の上の上野山と対峙し、北は漆川を隔てて六科丘遺跡を見上げている。また台地先端は60m程の比高差を持つ断層崖によって盆地床と画され、メ木遺跡の占地する下市之瀬の扇状地を見おろしている。

2) 歴史的環境

大畠遺跡の所在する櫛形町には現在50ヶ所程の遺跡が確認されている。全体的に捉えると、町内西半を占める市之瀬丘陵上では縄文時代中期を中心とする遺跡が豊富に存在し、遡るものには旧石器時代の遺跡も確認されている。またこの丘陵上では弥生時代末の集落も点在しているが、古墳時代に至ると遺跡の中心は盆地床に移行する。さらに平安時代以降になると町内全域に遺跡の分布は拡散する。

しかしこれらの遺跡の中で正式な発掘調査を受けているものは十指にみたない。以下それらを中心に概略的に説明したい。

まず市之瀬丘陵上では、六科丘遺跡④・上の山遺跡⑤・長田口遺跡⑥・物見塚古墳⑦・六科丘古墳⑧等が発掘調査を受けている。六科丘遺跡は六科丘先端の円頂丘逆傾斜面に占地する弥生時代末の集落を中心とする遺跡で、33軒の竪穴住居址、4棟の掘立柱建物址等が検出された。また旧石器時代の遺物や縄文時代後期を中心とする祭祀関係の遺構が発見されている。長田口遺跡は六科丘遺跡から同じ台地面を西へ500m程すんだ地点にあり台地南縁に位置している。詳細は現在整理中であるが、縄文時代中期及び弥生時代末の集落遺跡の一部である。弥生時代の遺構としては、6軒の竪穴住居址が検出され、伊勢湾系の土器も出土している。

上の山遺跡は六科丘遺跡とは市之瀬川を隔てて南隣する上野山台地の北縁部に占地している。縄文時代中期及び弥生時代末の集落遺跡の一部で数基の方形周溝墓も確認されている。上野山台地北縁部には上の山遺跡の他にも上ノ東遺跡(甲西町)、東原遺跡(同)と弥生時代末の集



1 豊小学校遺跡	21 御崎神社古墳	37 長田(B)遺跡
5 川上道上遺跡	22 無名古墳	38 ノ木遺跡
8 狐塚古墳	23 曾根遺跡	39 下宮地遺跡
9 狐塚遺跡	24 神明遺跡	40 鑄物師屋遺跡
10 大畑(A)遺跡	25 北峰遺跡	41 無名古墳
11 物見塚古墳	26 曲輪田(狐森)遺跡	42 コウモリ塚古墳
12 古屋敷(中野)遺跡	27 上杉本遺跡伊	43 宝珠寺西遺跡
13 上の山遺跡	28 伊奈ヶ湖遺跡	44 南伊奈ヶ湖遺跡
14 椿城跡	29 高尾(丸山)遺跡	45 古屋敷(十五所)遺跡
15 石原田遺跡	30 中野城	46 柿平(A)遺跡
16 東原(B)遺跡	31 (伝)小笠原氏館	47 柿平(B)遺跡
17 長田口遺跡	32 笠若	48 善徳院横遺跡
18 東原(A)遺跡	34 六科丘遺跡	49 大畑(B)遺跡
19 中畑遺跡	35 六科丘古墳	50 平岡農村公園遺跡
20 伝嗣院原遺跡	36 長田(A)遺跡	51 御崎神社横遺跡

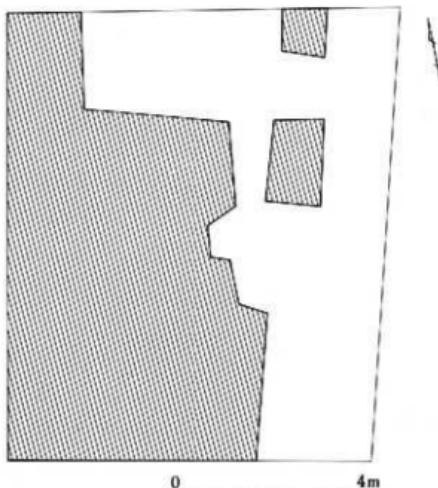
第3図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 [1 / 50,000]

落遺跡が並び、六科丘遺跡・長田口遺跡と共に有機的な関連を持った遺跡群として把握しうる。またこの台地は中世に於て椿（上野）城の築かれたところで、地中レーダー調査でも大規模な城館跡であったことが確認されている。丘陵縁辺には數基の前期古墳が築造されている。それらのうち物見塚古墳は釜無川以西では唯一の前方後円墳で全長46mを測り鉄剣・管玉・鏡などが副葬されていた。六科丘古墳は径28m程の造り出し付円墳で剣・須恵器等がえられている。前者は5世紀初頭、後者は同中葉の築造であろう。市之瀬丘陵上では、これらの遺跡以外にも縄文時代中期を中心とする多くの遺物が採集され当該期の大きな集落の存在を予想させる。また丘陵を見おろす山頂には、中野城⑩、笹若⑪等の中世の城郭が築かれている。

伝嗣院の台地を降った上宮地に所在する曾根遺跡⑫は古墳時代初頭の集落の一部でS字状口縁甕が多量に出土している。下市之瀬の扇状地上に位置するメ木遺跡⑬は縄文時代中期及び奈良・平安時代の集落遺跡である。縄文時代中期の竪穴住居址4軒と奈良・平安時代の竪穴住居址34軒などが発見されている。この周辺は「塚原」という字名が示すようにかつては多数の群集墳が存在していたと思われるが現存するものは数基にすぎない。

メ木遺跡から1km程東方には神部神社が鎮座している。これは高尾の穗見神社と共に「延喜式」にも記載されている古社で、神社北東には祭祀遺構が発見された下宮地遺跡⑭が存在している。

盆地の扇状地では遺跡の数が極端に減少するが、豊小学校周辺の豊小学校遺跡①や古屋敷（十五所）遺跡⑮などの古墳時代から平安時代の集落遺跡が期待されるなど、他にもいまだ確認しえない遺跡が多数あるものと思われる。



第4図 大畠遺跡発掘区域図 [1 / 120]

第Ⅲ章 調査の方法と基本層位

1) 調査の方法

発掘前に於ける東京電力㈱との協議で、大畠遺跡内の本鉄塔 No-12 地点についてはその敷地約100m²を全面的に発掘を実施し、隣接する仮鉄塔 No-9 地点については試掘調査を加えた後必要が認められれば本調査を行うこととした。また柳町柿平から山寺にかけて点在する本鉄塔 No. 7・8、仮鉄塔 No. 5・6 地点についても試掘調査の結果によって本調査に移行することとした。仮鉄塔はその塔脚の部分のみ掘削を行うことであり、それぞれ 4 本の塔脚のうち対角線上の 2 本の部分について各々 2 m² の試掘坑を設定した。本鉄塔の敷地内においては 4 ~ 6 m² の試掘坑を設定したが果樹等のためその位置は一定ではない。最終的に試掘坑は、仮鉄塔 No-9 地点で 2 ヶ所 (G 1・G 2)、No-5 地点で 2 ヶ所 (G 3・G 4)、No-6 地点で 1 ヶ所 (G 6) となり、本鉄塔では 6 m² のものが各々 1 ヶ所 (G 5・G 7) となった。それらをすべてあわせ今回の調査対象面積は 114 m² となった。

以上の様に今回の発掘調査は対象面積が狭少であったこともありすべて人力でおこなった。大畠遺跡では耕作土を取り除いたところ発掘区東辺部及び北東隅については既に開墾時に擾乱が進んでおりそれ以上の排土を中断した。そのため実質的に発掘面積は 80 m² 程となったが、以下述べる様な成果を得ることができた。

2) 基本層位

試掘地点に於ける土層は付章で述べることとするが、大畠遺跡に於ける基本土層は以下の通りである。

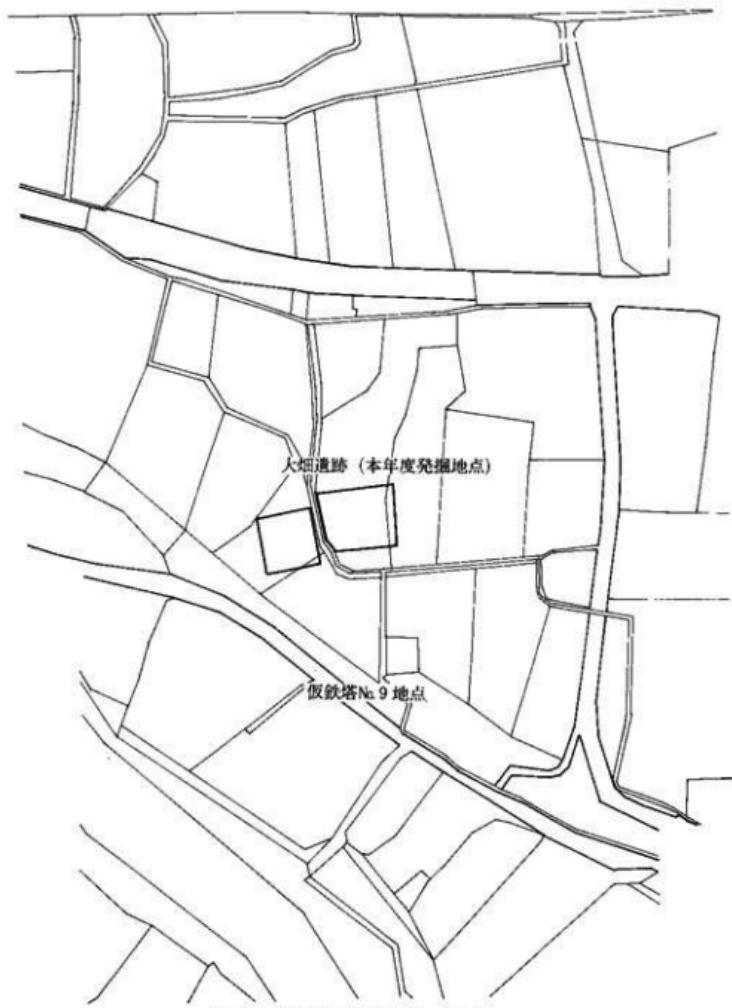
- 第 1 層：茶褐色土層 (耕作土)
- 第 2 層：暗茶褐色土層 (粘性弱、しまり有) 小レキ混入
- 第 3 層：黒褐色土層 (粘性弱、しまり有) 小レキ混入
- 第 4 層：黒褐色土層 (粘性弱、しまり有)
- 第 5 層：黄褐色土層 (粘性やや強、しまり無) 小レキ、ローム粒混入
- 第 6 層：明褐色土層 (粘性やや強、しまり有) = ソフトローム層
- 第 7 層：黄色砂質土層 (粘性弱、しまり無)
- 第 8 層：赤褐色土層 (粘性極めて強、しまり有)

なお、土層断面図には表現されていないが北半部では第 2 層と第 8 層とのあいだに黄色砂質土層が確認された部分があり、第 7 層とした。

本遺跡に於ける土層は非常に特異なものがあった。特に北半部と南半部とではその様相を全

く異にしている。ちなみに約10m程西にずれたG 1・G 2地点では第1～第3層が堆積しその下位にローム層が、さらにその下位に第7層が認められた。また本遺跡の第8層は六糸丘遺跡に於て黄色軽石層（Pm-1）下位に認められた土層と近似したものであった。従って南北土層断面ほぼ中央で認められた第8層の垂直的な落込みは自然的要因によるものと解釈したい。

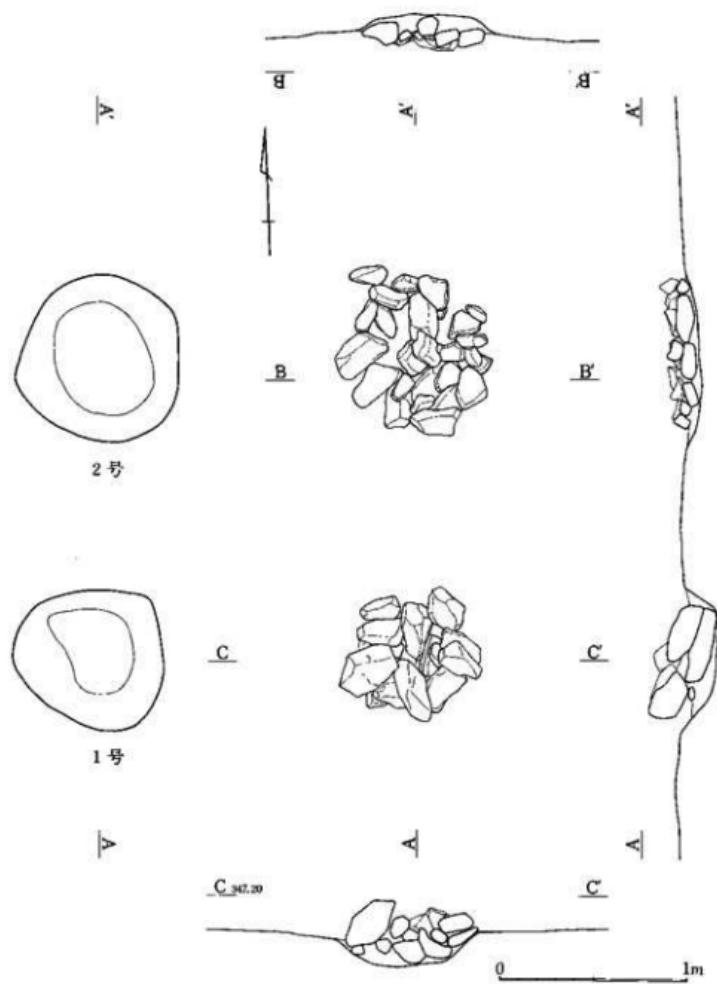
これらのうち、主として第3・4層から遺物が出土した。また第4層上面・同下部及び第6・7層上面から遺構が検出された



第5図 大畠遺跡位置図 [1 / 1,000]

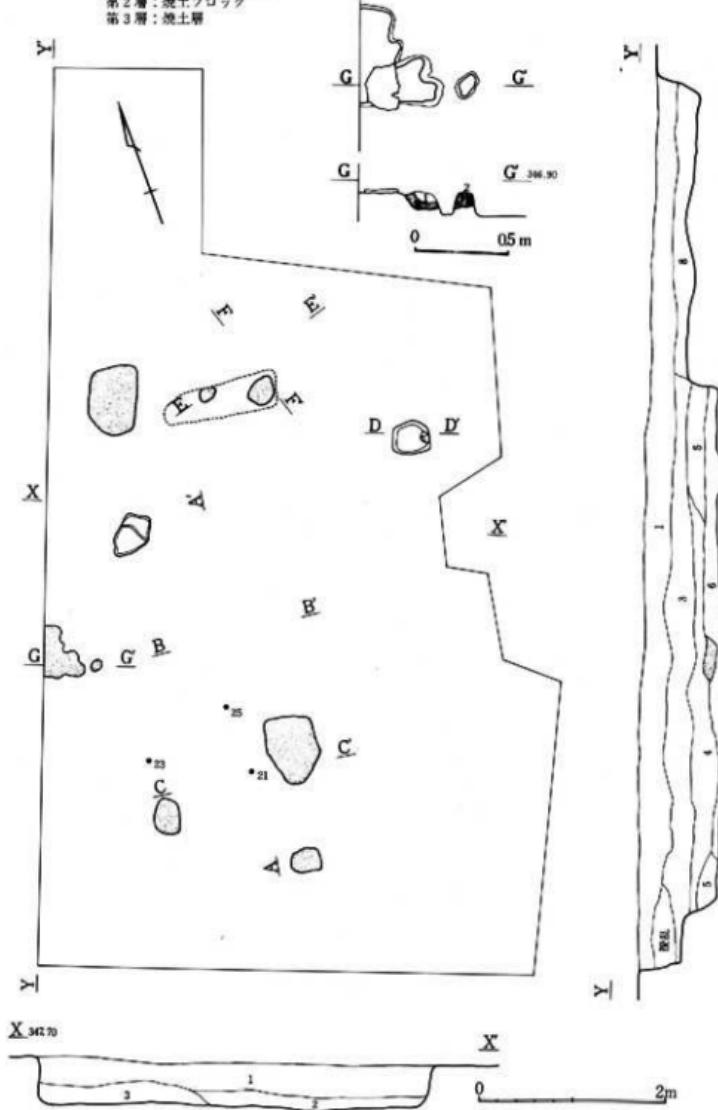
第IV章 発見された遺構と遺物

1) 集石遺構



第6図 1号、2号集石遺構 [1 / 30]

第1層：明褐色土（含焼土）
第2層：焼土ブロック
第3層：焼土層



第7図 造構全体図及び焼土滲り分布図 [1 / 60]

1号・2号集石遺構

発掘区の南西部から並んで検出され、共に第4層を掘り込んで構築されている集石土壇である。1m程離れてほぼ南北に並んでおり、南側のものを1号集石遺構、北側のものを2号集石遺構と呼称した。

1号集石遺構（第6図、図版II）

20個程の角礫で構成される。礫の大きさは人頭大のものを主体とするが、なかには40cmを越えるものも含まれる。土壇は径70cmほどの不整円形で、深さは20cmを測る。断面形は台形状を呈し土壇底部は平坦である。礫は土壇内部にぎっしり詰まった状態で検出され、土壇底部より僅かにういていた。覆土は黒褐色土で礫を大量に含んだものであった。

2号集石遺構（第6図、図版II）

1号集石遺構の北1mから検出され、まったく同じ面に構築されている。35個ほどの礫で構成されているが、礫の大きさは1号集石遺構に比べ一回り小型である。土壇は平面不整円形で、断面は極浅い皿状である。規模は径80~85cmで、深さは10cmにみたず底面は凸レンズ状を示す。礫は土壇内部に詰まった状態で検出された。上面は土壇底部に沿って窪んでいるがこれは本来の姿であるか否か明確でない。

この両集石遺構の周辺には広範囲に焼土粒が散っていた。これは本来的に集石遺構に伴うものであるか、後に述べる集石遺構下部から検出された焼土溜りに因るものであるかは明らかでない。

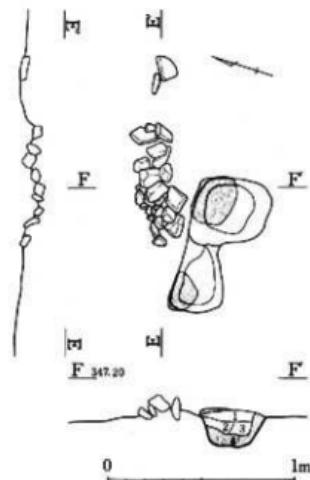
3号集石遺構（第8図、図版III）

発掘区北西部から検出され、黄色砂質土層の上面に構築されている。25個の小礫で構成され、幅20cmで長さ1mほどほぼ東西に並んでいる。集石遺構の南西部には焼土溜りが2ヶ所認められ、その下部はひきご型のピットが設けられている。ピットは長さ60cm、幅40~30cmで西半部が一段深く掘り下げられ深さは20cmを測る。ピット内は4層に分けられ焼土が大量にふくまれる。また集石遺構西側からも100×150cmの範囲で焼土溜りが検出されている。

2) その他の遺構

焼土遺構（第7図、図版IV）

発掘区南西部から4ヶ所焼土溜りが検出された。すべて第6層上面に認められ、5~10cmの厚さで堆積していた。特に発掘区西壁沿いのものは焼土ブロックを中心として20cmほどの厚さであった。焼土の



第8図 3号集石遺構 [1 / 30]
第1層：暗褐色土（含焼土）
第2層：黄褐色土
第3層：暗褐色土
第4層：橙褐色土（焼土）

周囲には弥生時代末の土器片が散乱しており、造構の性格は不明であるものの当該期の所産としうるであろう。

また、先に述べた1号・2号集石遺構はこれらの焼土遺構の上部に営まれており、その年代は明らかに古墳時代以降のものである。

土壙 (第9図、図版IV)

発掘区は中央から検出された。平面形は不整円形から隅丸方形を呈し、規模は45~40cmを測る。断面形はボール状を示し深さは15cm程度を有する。土壙東壁には細長い角礫が据えられていた。遺物は縄文時代中期に属する土器片1点が出土している。

3) 出土した遺物 (第10・11図、図版V・VI)

大畠遺跡からはコンテナで1箱の遺物が出土した。しかし細片化が進み、また摩耗が著しかったため図示したものは僅かであった。また遺物のほとんどは第3・4層から出土し、特に第6層上面で認められた焼土溜り周囲には弥生時代終末の土器片が散乱していたのが注目された。以下出土した遺物を概述したい。

1は太い沈線で三角区画文が描かれ、内部を沈線で充填している。器壁は10mmとやや厚手である。2も同様な沈線で縱長の区画文を描き、短い沈線で充填している。共に胎土に砂粒を含み、色調は淡褐色から燈褐色を呈する。縄文時代早期後半、鶴ヶ島台期に比定されよう。

3は肩部に棱を持つ深鉢の破片で粗い斜綱文に短い沈線をほどこす。胎土に金雲母・長石・砂粒を含み、色調は暗赤褐色を呈する。縄文時代早期後半のものか。

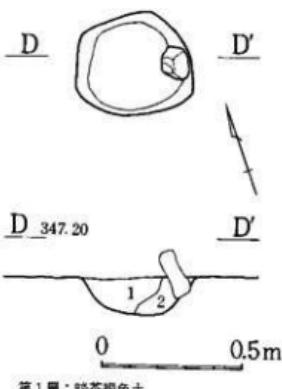
4は横位の沈線の下位に沈線によるV字状文が連続して施される。胎土に雲母・細砂粒を含み色調は淡褐色を呈する。

5~13は条痕文系の土器である。5~7は壺型土器の口縁部で、5・6は緩やかな波状口縁で口唇部に押捺を加えている。7は口唇部に刻み目を持つ。8は他に比べ条痕が細かく不定方向に施される。胎土はすべて雲母・長石・細砂粒を含むが、7は特に長石を多く含む。色調は6・12が暗赤褐色、7・11が淡褐色で他は茶褐色を呈する。弥生時代中期前半の所産であろう。

14は横位の深い沈線が巡る。胎土に細砂粒を含み、色調は淡褐色を呈する。

15は口縁部破片で、口縁部は刻み目を有し僅かに内湾する。口縁部から1cmほどは斜綱文が施される。胎土に長石・雲母・細砂粒を含み、色調はくすんだ茶褐色を呈する。弥生時代中期のものであろう。

16も口縁部破片で緩やかに波状をなす。胎土に雲母・細砂粒を含み、色調は淡褐色から黒褐色を呈する。



第1層：暗茶褐色土
第2層：暗赤褐色土

第9図 土壙 [1 / 20]



第10圖 出土土器 [1 / 3]

17は折り返し口縁壺口縁部破片。口縁内部に竹管による連続刺突文が施される。器壁は丁寧なナデ・ミガキが加えられる。胎土は細砂粒を含み密。色調は淡赤褐色を呈する。

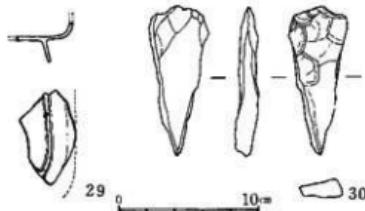
18は壺頸部破片。4本1単位の波状文が2段確認できる。17・18は弥生時代後半の所産であろう。

19・20・21は壺底部。19はや丸みを帯びた底部で径4.4cmを測る。胎土は白砂粒を含み密。20は径4.8cmを測る。内面はヘラケズリのちナデ。外面はナデのちミガキ。胎土は金雲母・白砂粒を含み密。色調は赤褐色を呈する。21は底部のはぼりが現存。径は10.4cm程となる。内面はナデ、外面は斜方向のハケ。底面に網代痕がのこる。胎土に雲母・白砂粒を含み、色調は淡褐色を呈する。

22~26は台付甕脚部。22は脚部破片。径8~9mmの穿孔が施される。胎土は雲母・白砂粒を含み、色調は淡褐色。23は接合部径3.8cm、脚高4cm、裾部径7.4cmを測る。脚部内面は横方向の細かいハケ、胴底部は丁寧なナデ。脚外面接合部は縦~斜方向のハケ、同裾部は縦方向の粗いハケ。胎土は細砂粒を含み、色調は赤褐色を呈する。24~26は接合部破片。24は胴底部ハケのち丁寧なナデ。胎土は白砂粒・雲母を含み、色調は茶褐色~燈褐色を呈する。25は接合部径6.6cmを測る。胴部内面ナデ、脚部内面横~斜方向のハケ。外面縦方向のハケ。胎土は白砂粒を含み、色調は内面燈褐色、外側淡燈褐色を呈する。26は接合部径4.8cmほどで胴底部ハケ、脚部ナデ、脚部外面ハケ。胎土は白砂粒を含み、色調は淡褐色を呈する。19~26は弥生時代終末から古墳時代にかけての所産である。

27は土師器皿破片。径は13.6cmを測り、内・外側共に回転ナデ。胎土は緻密で色調は乳茶褐色を呈する。

28は近世陶器破片。高台径5.4cmを測る。外面は茶系統、内面緑色系の釉が施される。17世紀代の所産であろう。



第11図 出土石器及び木器 [1 / 2]

29は漆器破片。高台高0.9cmを測る。外面は赤色に塗彩される。

30は小型の打製石斧。片刃のもので刃部はかなり使用されている。

1・4は土壌出土、21・23・25は焼土溜り周囲から出土している。また2は試掘G-1第Ⅲ層、5・19は試掘G-2第Ⅲ層、15は試掘G-2溝内からえられた。他は第3、4層から出土している。

第V章 まとめ

今回の発掘調査は、対象面積が狭小であったにも関わらず多くの成果を得ることができ、同時に多くの課題を残した。

まず遺構として、良好な集石造構を2基検出した。遺物を伴わないので時期の確定は不可能であったが、弥生時代終末を降らない焼土溜りの上部に構築されており、古墳時代以降の所産であることは明らかである。一見すると縄文時代の集石土壙と同様なものであったが、その性格等に付いては類例との比較、検討を待ちたい。発掘地点に隣接する畠地には江戸時代まで宗林寺があったところと伝えられており、それと何等かの関連を持つ宗教的、祭祀的遺構である可能性も否定しない。

焼土溜りは周囲の土器から弥生時代終末の所産であることは明らかである。性格・内容は明らかでないが、いずれにしても集落の周辺に営まれたものと考えられ、大畠遺跡全体の理解に対して一つの課題を残したものといえる。

大畠遺跡の市之瀬丘陵上には、弥生時代終末の小集落群が点在している。市ノ瀬川の刻んだ小谷を囲む様に4～5ヶ所の集落跡が有機的な関連をもちつつ存在し、県内でも当該期の集落群のあり方として一つのパターンを示している。大畠遺跡はこれらの遺跡群に挟まれる様に位置しており、これらの集落群との政治的・社会的関連は興味の持たれるところである。

ところで今回の調査にあたっては、縄文時代の遺跡が予想されていた。しかし調査の結果、縄文時代のものとしては僅か10点程の土器片がえられたのみであった。市之瀬丘陵上に於ける遺跡分布に再考を促すものともいえよう。

また、櫛形町周辺において、弥生時代中期の条痕文系の土器が発掘調査によって確認されたのは今回が初めてである。残念ながら遺構の検出はなし得なかつたが、良好な土器片を得ることが出来、付近に遺構の存在を予想させるに充分であった。本町周辺では空白地帯であった当該期の遺跡が想定したことは、櫛形地域への弥生文化の伝播だけでなく甲府盆地に於ける弥生文化の成立を考える上でも貴重な資料となろう。

参考文献

- | | | |
|---------------|------|---|
| 櫛形町誌編纂委員会 | 1966 | 『櫛形町誌』 櫛形町教育委員会 |
| 『櫛形山の自然』編纂委員会 | 1976 | 『櫛形山の自然』 山梨県立巨摩高校 |
| 六科山遺跡調査団 | 1985 | 『六科山遺跡』 櫛形町教育委員会 |
| 文化庁・文化財保護部 | 1981 | 『全国遺跡地図19山梨県』 国土地理協会 |
| 櫛形町教育委員会 | 1985 | 『上の山遺跡』 櫛形町教育委員会 |
| 甲西町教育委員会 | 1986 | 『上ノ東遺跡』 甲西町教育委員会 |
| 出月洋文 | 1989 | 『長田口遺跡調査説明会資料』 |
| 小口妙子 | 1987 | 『山梨県中巨摩郡甲西町上ノ東（通称東原）の採集資料』『山梨縣考古學協會誌 刊行号』
山梨県考古學協會 |
| 山梨県教育委員会 | 1987 | 『金の尾遺跡』 山梨県教育委員会 |

付章 試掘調査の概要と成果

1) 調査の概要

第Ⅲ章で述べた様に、今回は5地点で試掘調査を実施し、設定した試掘坑は計7本であった。試掘坑の規模は本鉄塔地点と仮鉄塔地点とでは相違があるが、基本的に仮鉄塔地点では 1×1 mのものが2ヶ所、本鉄塔地点では 2×2 (2.5)mのもの1ヶ所である。試掘坑番号は大畠遺跡の範囲に入る本鉄塔No.9地点のものをG-1, G-2と呼称し、他は北からG-3～G-7とした。

掘り下げはすべて人力で行ない、1.0～1.5m程掘り下げた。

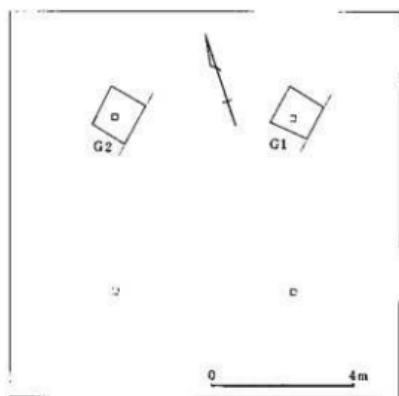
これらのうち本鉄塔No.9地点は台地上に存在し、他は扇状地上に位置する。

2) 調査の成果

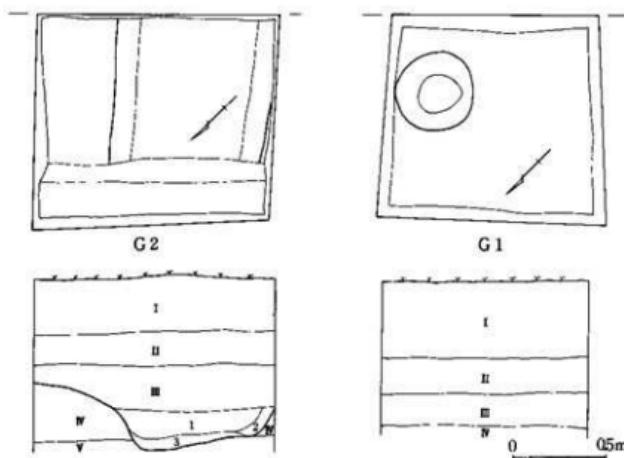
各試掘坑の基本土層は、土層断面図に示した通りである。基本的に、台地上(G-1, G-2)では、耕作土・茶褐色土・ローム層・黄色砂質土の順に堆積している。市之瀬丘陵ではローム層の下位に黄色軽石層(Pm-1)が観察されるのが普遍的であるが、今回は確認できなかった。また、台地下の扇状地(G-3～G-7)では耕作土の下位は礫層及び砂礫層が互層となって堆積していた。

大畠遺跡隣接地に設定した、G-1, G-2からはそれぞれピット・溝が検出された。ともにローム層上面から掘り込まれたもので、ピットは23cm、溝は25cmの深さをもつ。遺物はそれぞれ数点を図示したが、遺構に伴うものであるか否かは明確でない。

G-3～G-7からはそれぞれ数点の土器片を検出したが、図示しうるものはなかった。しかし、断面図に示した様に礫・砂礫の堆積が著しく、遺構・遺物が更に深く埋蔵されている可能性は否定し得ない。特にG-6・G-7付近では、耕作者の話によると地下7～8m程で赤褐色の壺(弥生土器或は土師器か)を得たとのことでもあり注意を要しよう。

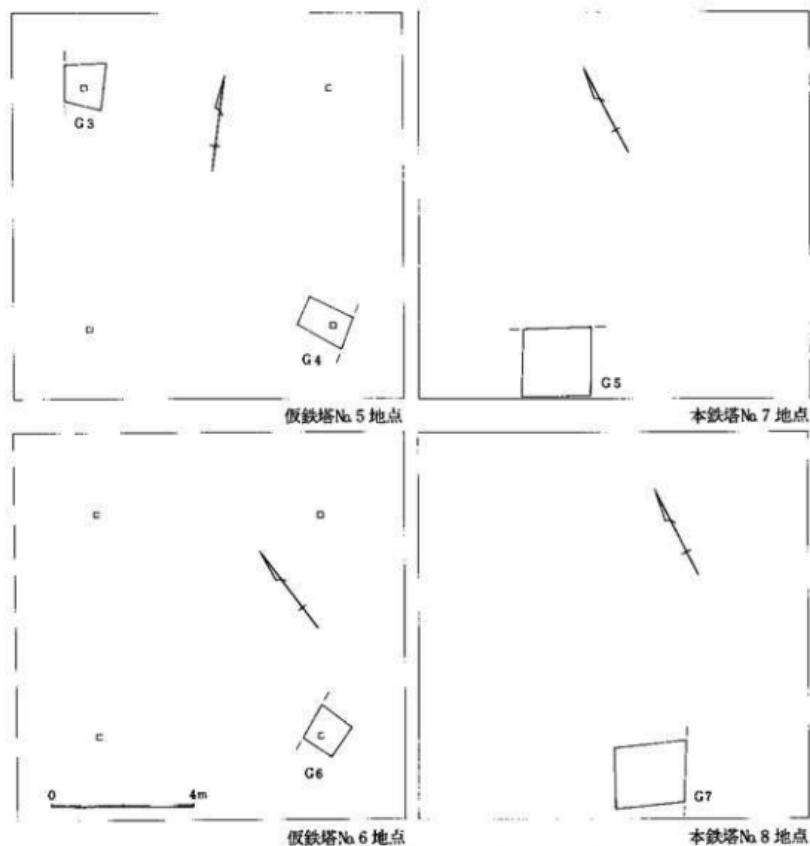


第12図 試掘坑設定図 (G 1～G 2) [1 / 160]

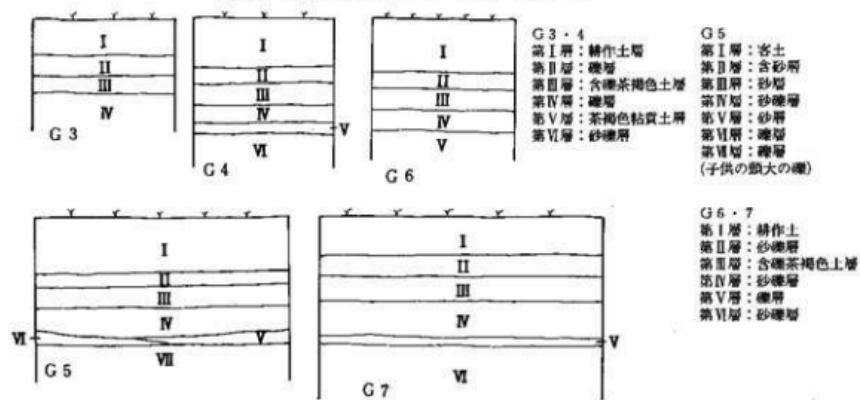


第Ⅰ層：耕作土
第Ⅱ層：暗茶褐色土層
第Ⅲ層：黒褐色土層（礫混入）
第Ⅳ層：ローム層
第Ⅴ層：黃色砂質土層
第1層：黒褐色土層
第2層：黄褐色土層
第3層：明茶褐色土層（ローム混入）

第13図 試掘坑平面図及び土層断面図 [1 / 30]



第14図 試掘坑設定図 (G 3 ~ G 7) [1 / 160]



第15図 試掘坑土層断面図 [1 / 40]

図版 I



遺跡全景



遺跡遠景（南より）

図版Ⅱ



1号・2号集石遺構



2号集石遺構



1号集石遺構



3号集石造構及びピット



3号集石造構及び焼土溜り



3号集石造構

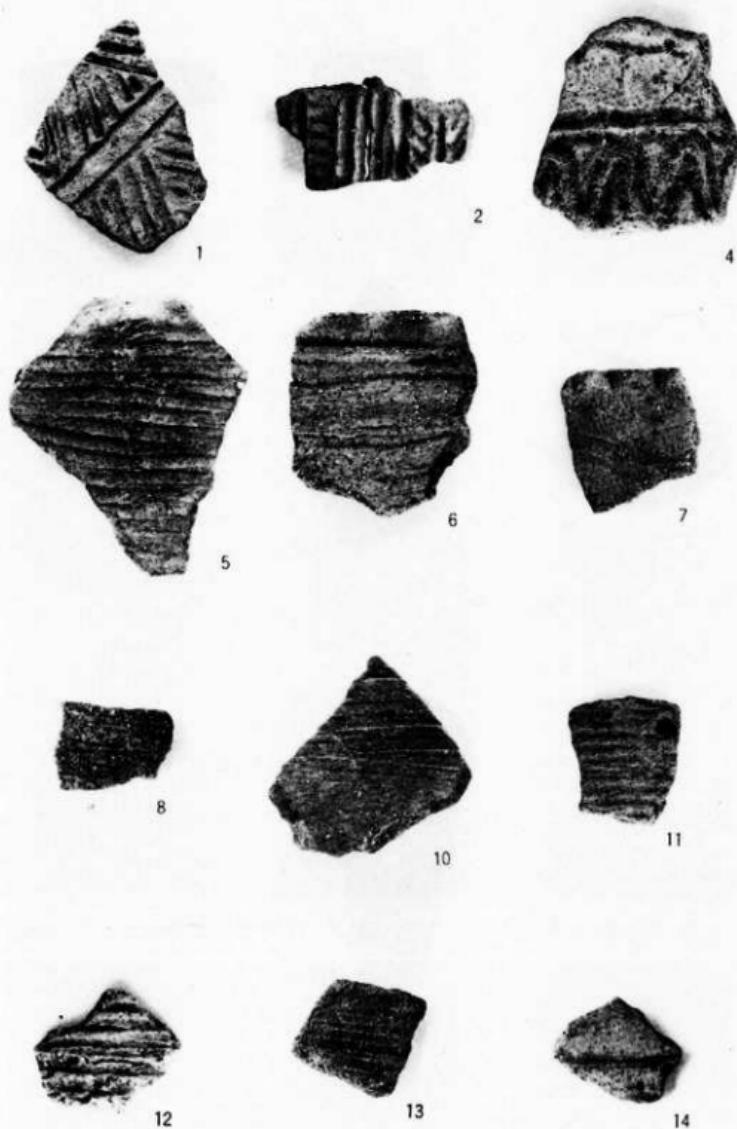
図版IV



土壤



焼土浦り



出土遺物(1)

図版VI



15



16



17



18



21



23



30

出土遺物(2)



作業風景



調査参加者

櫛形町文化財調査報告 №7

大畑遺跡

——山梨県中巨摩郡櫛形町大畑遺跡発掘調査報告書——

1989年6月1日 印刷

1989年6月10日 発行

編集・発行 櫛形町教育委員会

印 刷 森 出 版

